

大英帝国のインド新帝都計画に関する研究

正会員 ○ 本江正茂

1: 研究の対象

本稿の対象は、英領インド帝国の首都ニュー・デリーの都市計画である。現在もインド連邦共和国の首都として機能しているニュー・デリーは、1913年に大英帝国インド政府の依頼により、「デリー・エキスパート」とよばれた新帝都計画委員会によって計画され、20年の歳月をかけて建設された。旧都カルカッタからの遷都式典は1931年に行なわれた。

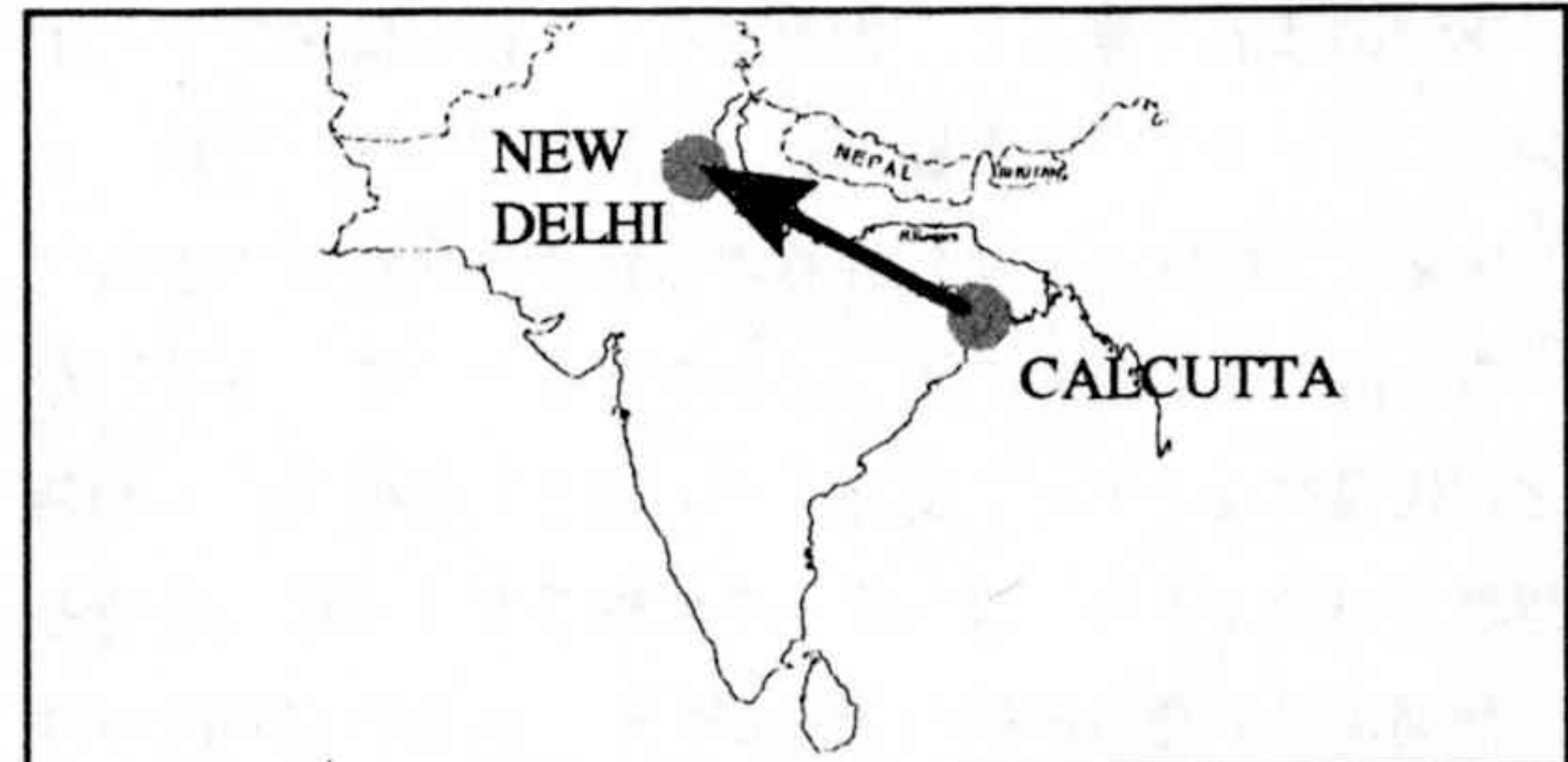
デリー地区は古くから、インドの諸王朝が都を構えた由緒ある古都であり、ニュー・デリーもまた「8番目のデリー」と呼ばれる。大英帝国以前にデリーに王宮をおいていたムガル帝国の首都が、シャージャハナバード、すなわち現在のオールド・デリーである。ニュー・デリーとオールド・デリーは、隣接し一対の都市として機能している。本稿ではもっぱらニュー・デリーに関して議論を進める。

2: ニュー・デリーの都市レイアウト

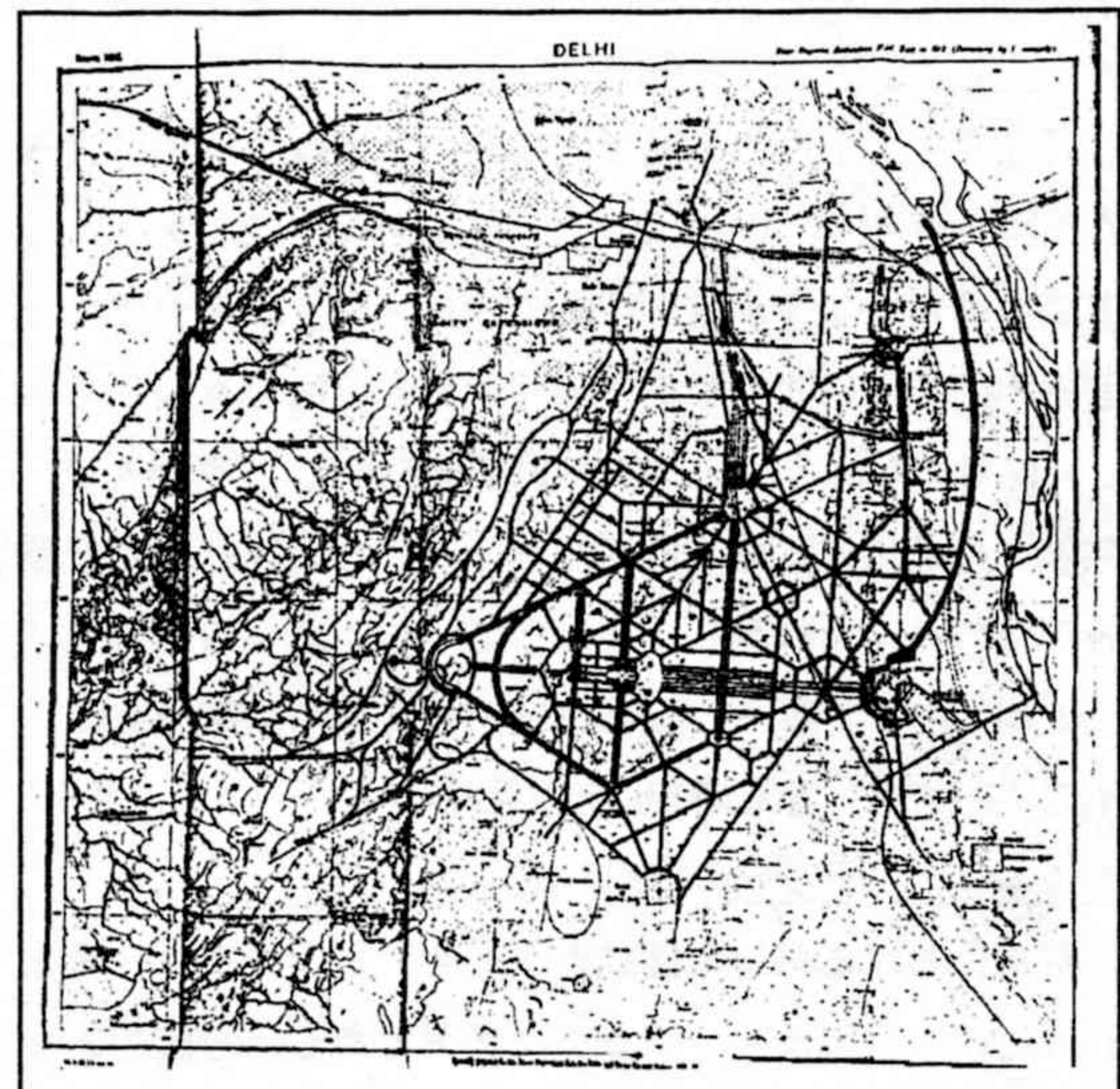
1911年、ジョージ5世によって遷都が発表されるとただちに、エドウィン・ラッチェンス、ジョージ・スウィントン、ジョン・プロディらによる新帝都計画委員会が組織され、敷地選定から都市レイアウト、建築規制、インフラ整備計画にいたる詳細な新帝都基本計画を策定する。その決定プロセスにおいて重視されたのは、コスト、衛生環境等とともに、景観のもつ象徴性と中心地区からの眺望の確保であった。そのため、新帝都の中心施設とされた副王官邸の立地決定は難航した。また、ヴィスタの焦点には、散在する歴史的遺構が多く用いられた。これによってニュー・デリーが歴史的な古都デリーと一体となることが象徴的に表現されると考えられたためである。

3: ニュー・デリーの建築

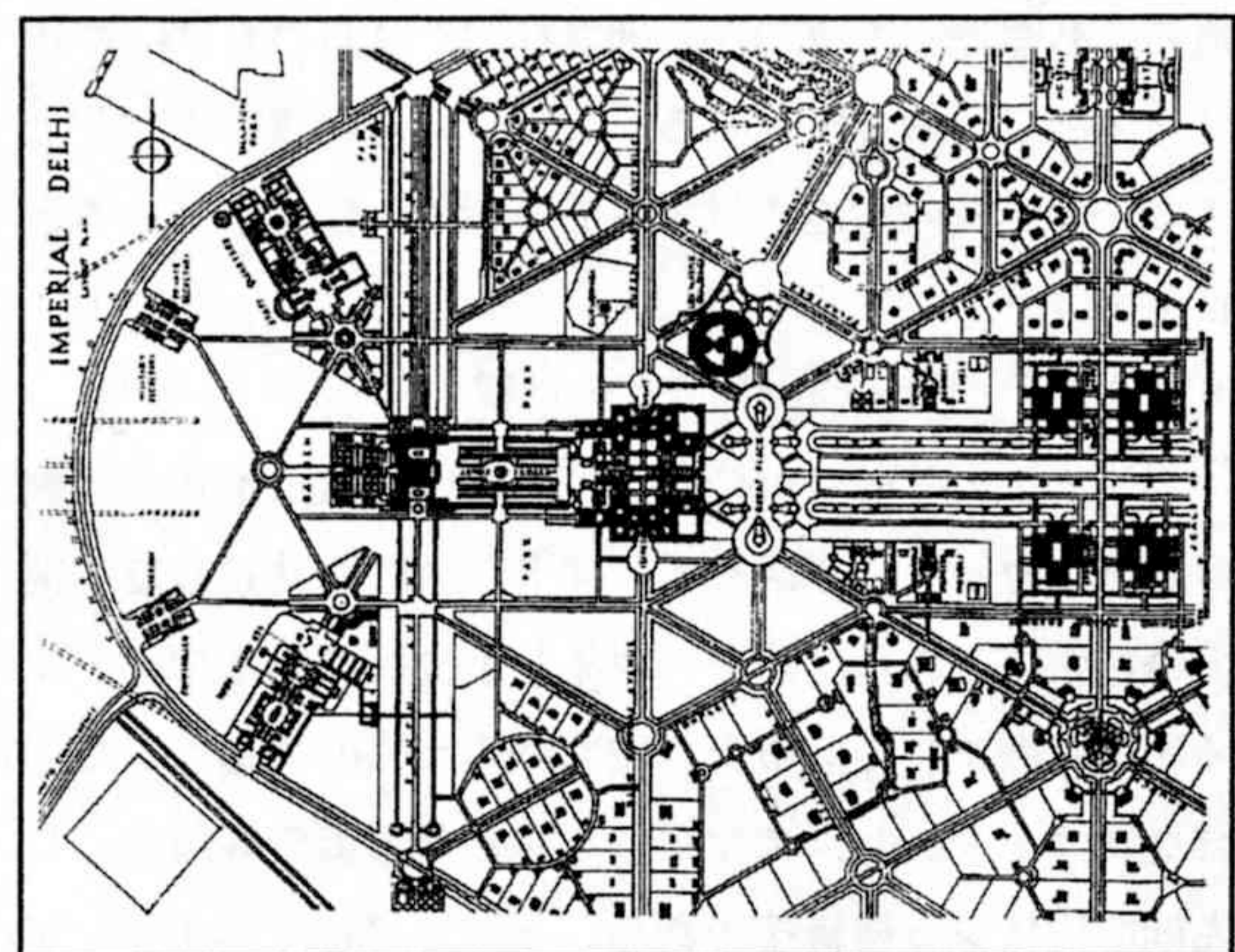
ニュー・デリーの建築の様式をいかなるものにするべきかについて、従来の植民都市同様ヨーロッパの古典主義か、インド伝統の歴史的様式か、あるいはそれらの折



▲カルカッタから新帝都へ



▲デリー新帝都計画最終レポート添付図面



▲中心部(キングズ・ウェイ)詳細図

衷の様式とするか云々の問題が英国本国で論争を引き起こした。その論争に対する委員会の公式見解は「英国の統治支配を示すべきデザイン」という極めて抽象的なものであった。

実際の事例を見ると、古典的な全体構成にインド・イスラム的なモチーフを盛り込んだ形で、「アングロ・インディアン様式」と呼ばれる折衷様式が採用されている。透かし彫りのスクリーンや屋上の「チャトリ」などが代表的なモチーフであるが、副王官邸のドームや新議事堂のエントランス・ポーチに顕著のように、機能とは無関係な形態の直接的引用が多く、折衷の段階は単純なものにとどまるといえよう。

4：ニュー・デリーの衛生

苛酷なインドの気候風土のなかで、温厚な環境に育った英国人が生活していくことは非常に辛いことであった。そこで彼らは上下水道・住宅の改良・衛生緑地の確保など、本国でも最先端の衛生環境改善の手法を導入して、これに対処した。また、厳密な機能別ゾーニングや人種・宗教・階級による居住区分をきっかりと設け、猥雑な都市環境の発生を規制しようとしている。オールド・デリーとニュー・デリーの間には設けられた衛生隔離緑地は、その思想をもっとも顕著に示すものである。

5：ニュー・デリーの緑地

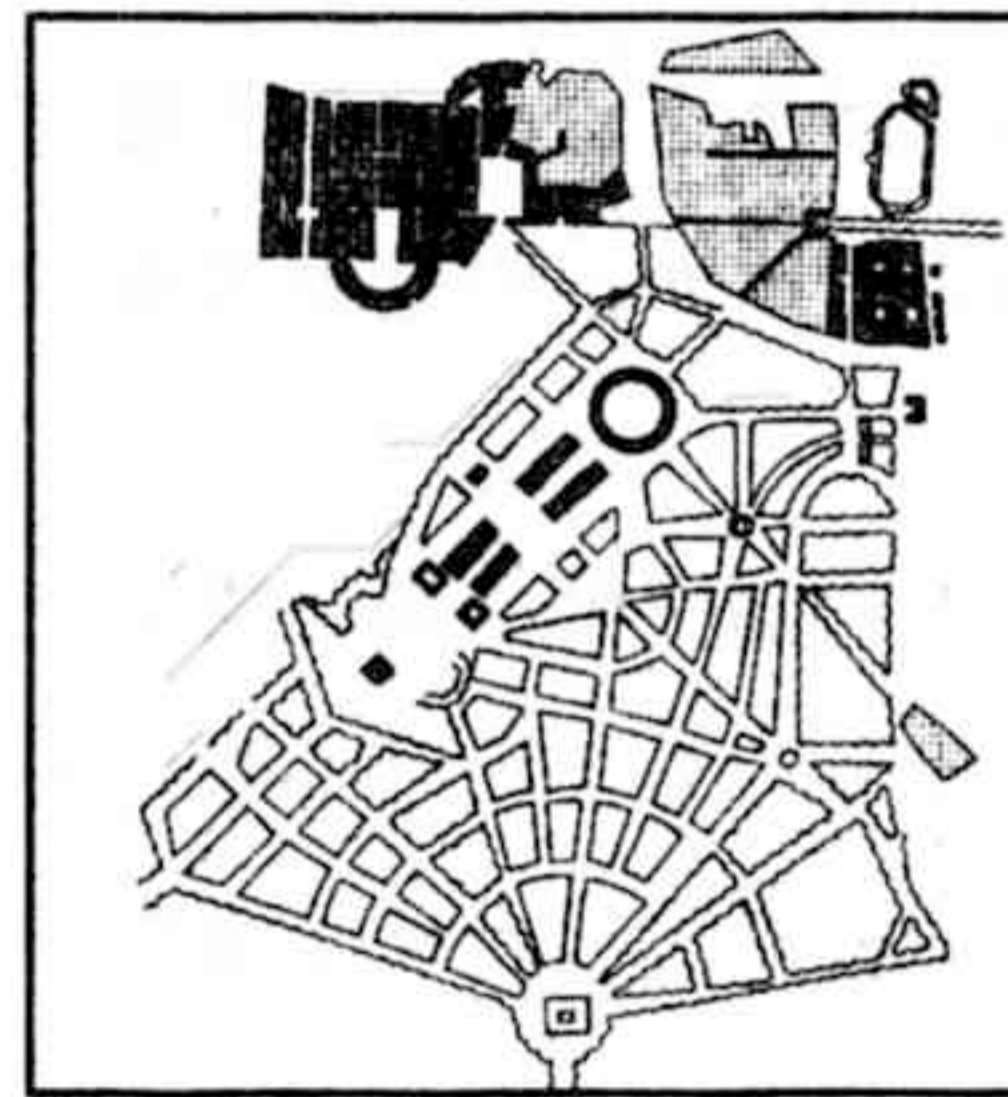
都市における緑地の価値がきわめて重大であると考えられたのも、ニュー・デリーの特徴である。公園のみならず、あらゆる住宅（藩王の邸宅以外はすべて公営）や街路にも徹底して植栽が計画され、それらの合計は都市域全体の3分の2に達する。ここには環境改善思想とともに、英国人の緑地に対する深い憧憬が作用していると言えよう。

6：従来のインド植民都市との比較

ニュー・デリー以前のインドにおける植民都市を代表するカルカッタ、ボンベイ、マドラスには共通した空間の構造が見られる。即ち、東インド会社商館を中心とする城壁に囲まれた旧市街／砲撃戦のための空地としての緑地「マイダン」／スプロールする新市街の3層からなる同心円状の一極構造である。それに対し、ニュー・デリーはオールド・デリーと対置された二極構造を持っている。これは、辺鄙な海岸に発達した従来の植民都市と、歴史的な文脈の中に建設された新帝都との性格の違いを示しているといえる。

7：展望

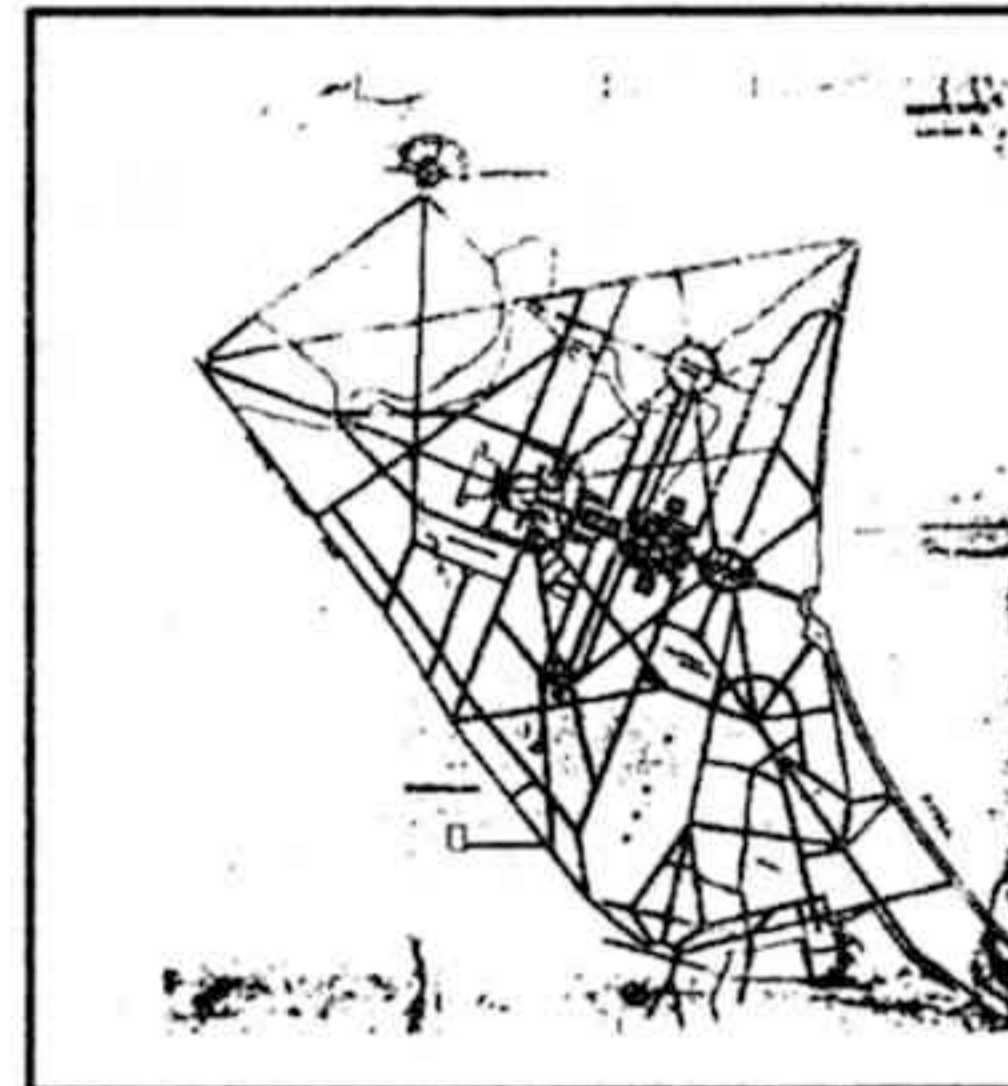
戦後の盲目的反省が冷静な評価を妨げてきたために、帝国主義時代の建築・都市計画はながく無視され続けてきた。ニュー・デリーもまた、20世紀最大の都市計画の一つでありながら、ほとんど言及されることのない都市であった。本稿では、ニュー・デリーの個別的問題を論じたが、次稿ではこのインド新帝都計画を、近代都市計画史のなかに位置づけることを目指す。



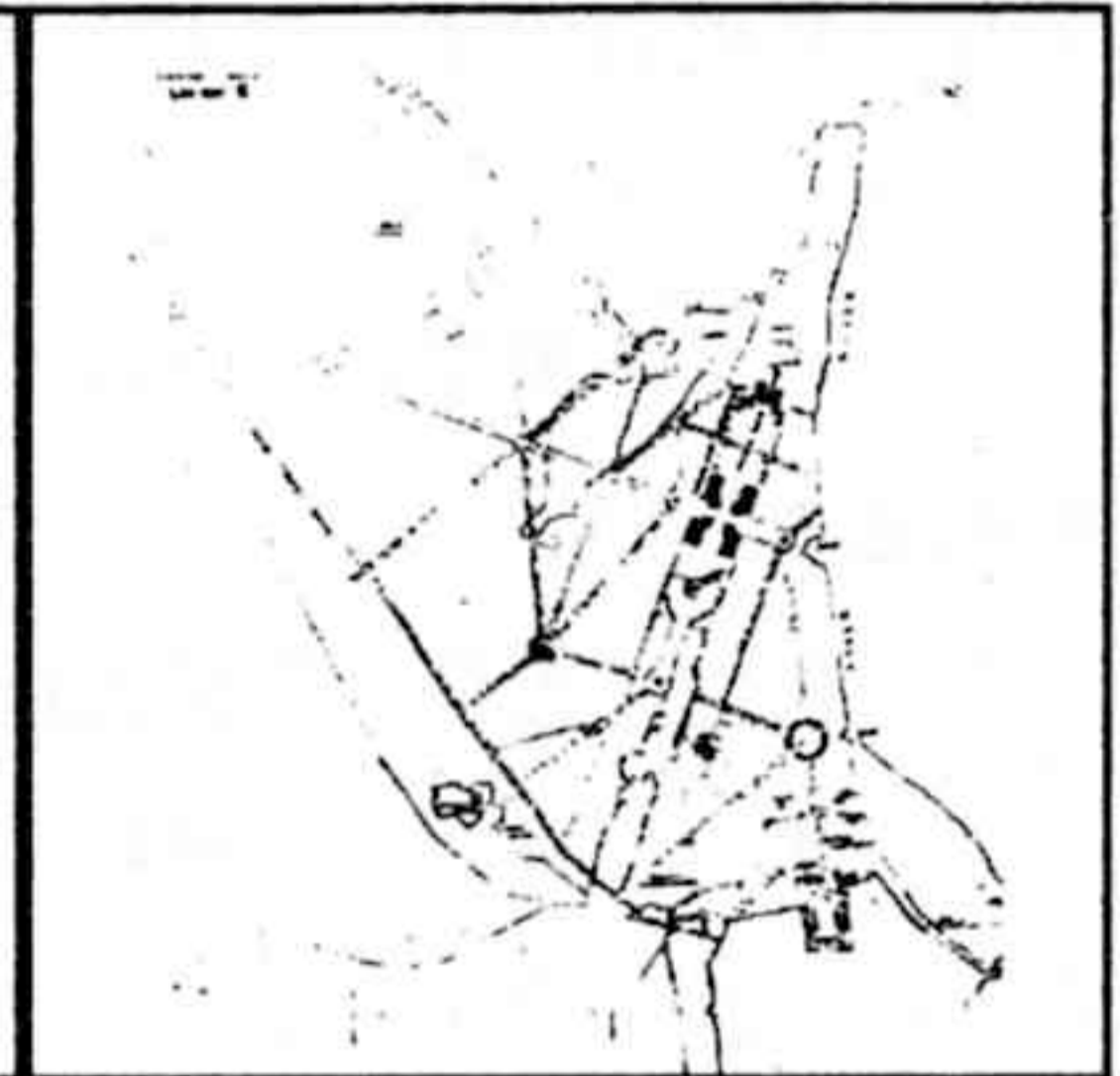
△1912.7.



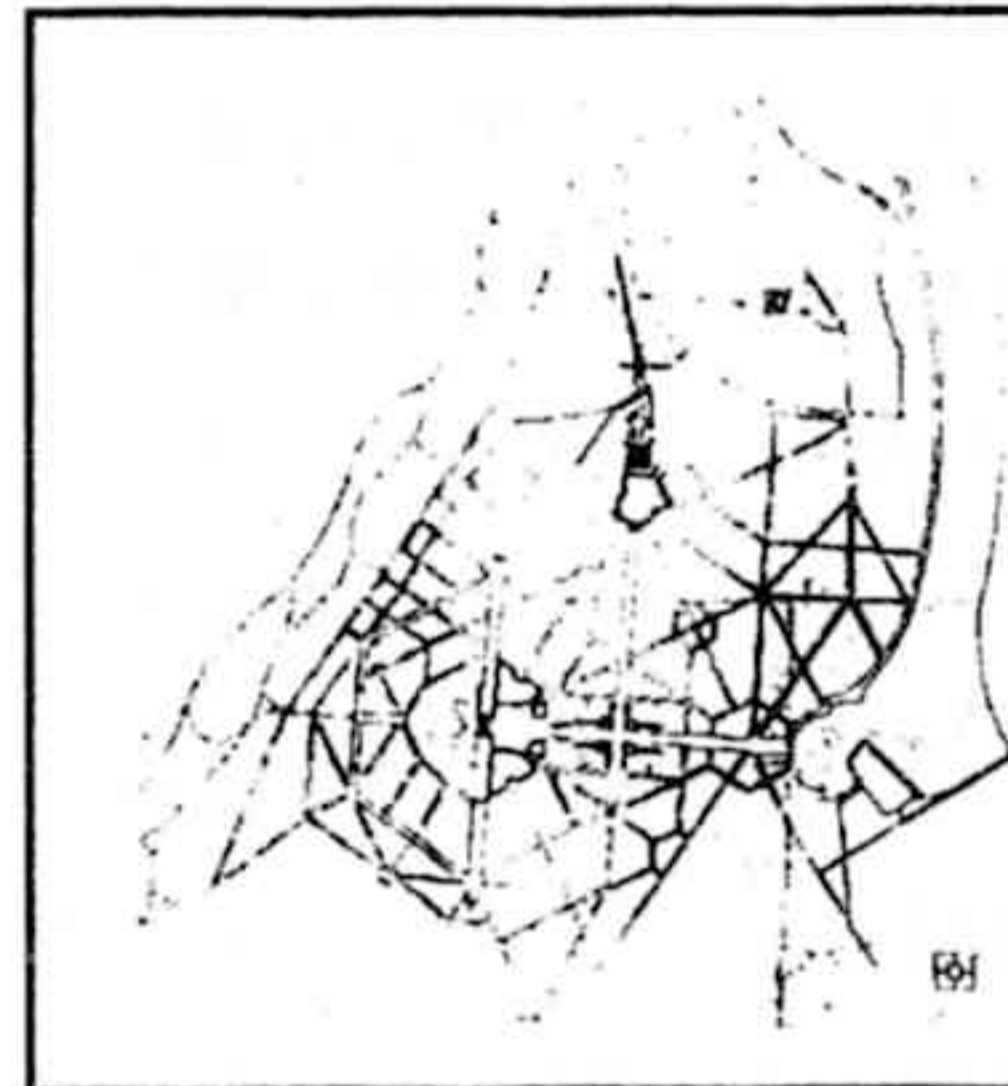
△1912.8.



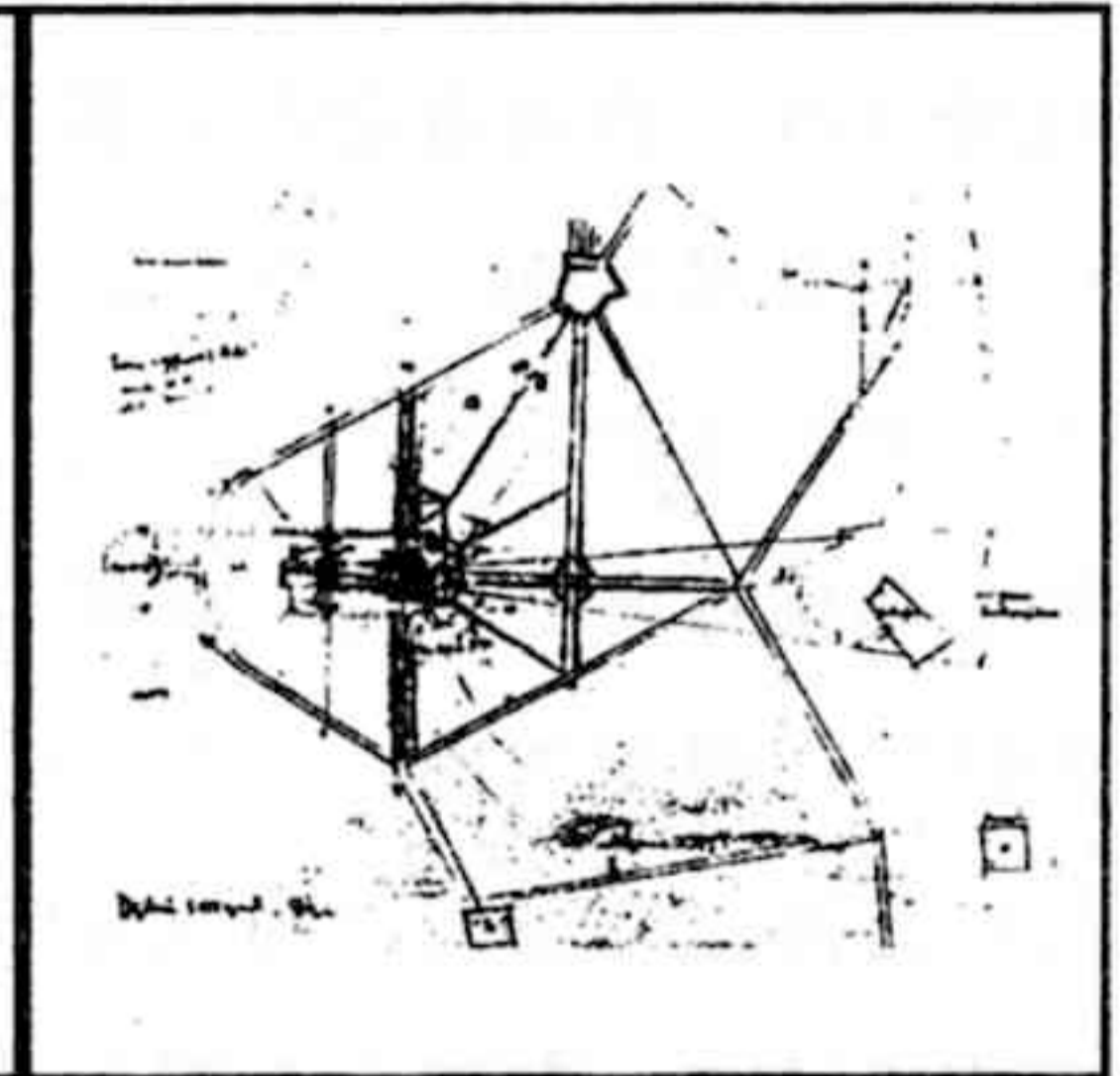
△1913.2.第3週



△1913.2.26



△1913.2.27



△1913.3.11

▲都市レイアウト・スタディ案



▲副王官邸のドーム



▲新議事堂のポーチ

・東京大学大学院博士課程